

## グローバル化への再挑戦

## 留学生パワーの活用



北京大学での日本大学合同説明会  
(右側筆者)

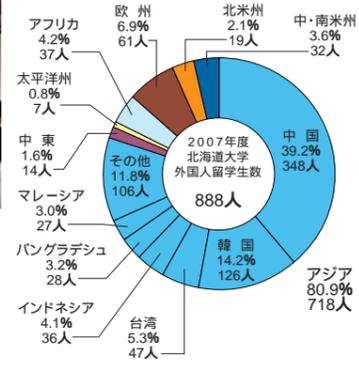


オフィスのある北大資源大厦

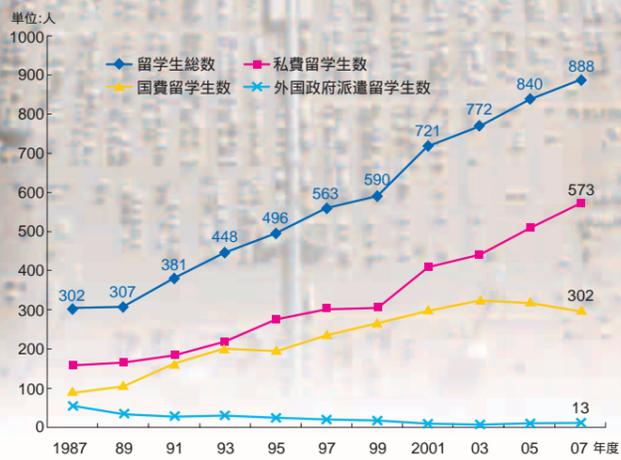


北海道大学北京オフィス開所式

地域・国別外国人留学生数(07.11.1現在)



北海道大学における外国人留学生数の推移(各年11月1日現在)



北海道は、欧米先進技術の導入など我が国の近代化を先導してきた歴史を有していますが、その潜在発展力を必ずしも十分に発揮できず、パブル後は経済的低迷を余儀なくされてきました。しかし最近では、東アジアからの観光客の増加や農水産物の輸出拡大など、さまざまな分野で国際化の新しい動きが顕著となってきています。

このシリーズでは、グローバル化を北海道がそのおろからで開放的なフロンティア精神を發揮して地域の活力に転換していくチャンスととらえ、その現状と課題、今後の展望を探ります。

この春、厳しい財政事情のなか、北海道大学では留学生のための宿舎を「棟新たに完成させ、既存の宿舎と合わせて247室に留学生の受け入れを始める。これにより北海道大学では入学一年目には、入居を希望するほぼすべての留学生が大学の提供する低廉な宿舎に住むことができるようになる」と見込まれる。これは国立大学に対する国からの運営交付金が毎年1%ずつ削減され、ましてや新たな学生寮建設のための予算など望めない国の財政事情にあつて、智慧をこめて資金を捻出した結果であり、世界に開かれた国際的な大学をめざす北大の強い意志がこめられている。

### 北海道大学における留学生

各種留学生数は日本全体では、中曽根内閣時代に打ち出された10万人計画を2003年に達成、05年にいったん12万人を超えてからは、微減傾向を示し、近年は踊り場へ出た感がある。北海道についても03年の1960名をピークに伸び悩みが見られ、昨年5月段階で1776名(全国の1.5%)となっている。このように北海道における外国人留学生はまだかつて多いとはいえないものの、ビジネス滞在の外国人がそれほど多くはない土地柄からすれば、留学生は地域の国際化にとって重要である。とりわけ、留学生数の45.8%が北大によって占められており(07年5月現在)、北大が北海道における留学生受け入れ動向をかなりの程度左右している。

全国、北海道の留学生数には明らかに頭打ち傾向がみられるのに対して、フロンティア・スピリットの建学精神と美しく広大なキャンパスにあこがれて、北大に入学する外国人留学生数は、なお右肩上がりの成長を続けている。昨年11月1日現在では82カ国から合計888名が在

生の比率は6割を超えることを考えると、まだ相当の潜在性が残されている。当オフィスは中国から北大への誘導ルートとして大いに活用されることを期待されている。

中国各地ですでに何度か留学説明会や留学フェアなどを開催してきて感じるのは、中国の方々は北海道に対して日本の他地域とは異質の関心ともあがれともつかぬ心情を抱いてくれているということである。北大としてはこれをぜひとも大学の教育や研究への関心へとつなげていかなければならない。

### 留学生受け入れ拡大のための施策

北大では優秀な留学生を引きつけるために、宿舎の充実のほかにも、すでにいくつかの仕掛けを用意している。第一には大学独自の奨学金制度である。3年前には総長奨励金として年間150万円(初年度は200万円)を卒業まで支給する特別奨学金制度を設け、現在、中国、韓国からの留学生6名がこの制度により研究に励み、今年も新たに3名の受け入れを予定している。また、今年度からは大学の資金と部局ないし外国政府の資金のマッチングにより、奨学金と学費を支給する新制度を発足させる。中国政府が昨年からは始めた名門大学に所属する5000名の博士課程院生を外国に送り出すプロジェクトによる学生には、この枠組みを適用することで、授業料などを事実上免除する。第二には、留学生がアパートなどの賃貸借契約を結ぶ際に、大学が機関として保証人になる仕組みを整え、トラブルの発生を防ぎ、リスクをヘッジすることとした。第三に、昨年度からすべての留学生に対して渡日直後の諸手続(空港出迎え、銀行口座開設、外国人登録、各種保険、アパート探しなど)のお手伝いをする学生サポーター制度を

籍している。このうち大学院に在籍する研究留学生が659名と全体の74.2%を占めており、教員の所属を学部から大学院に移した大学院大学としての北大にとって、大学院での教育・研究は、すでに留学生なくして成り立たなくなっている。

北大の留学生を出身国・地域別に見ると、中国の39.2%を筆頭に、韓国14.2%、台湾5.3%、インドネシア4.1%、バンラデシュ3.2%、マレーシア3.0%などが続いている。エルムの木陰では現在、中国語、韓国語、英語、インドネシア語など、さまざまな外国語が飛び交い、大学生協が運営する学生食堂ではイスラム圏からの学生やその家族のために、ハラールフード(ムスリム式の調理方法による献立)を提供するイベントを毎年開催するなど、学内でイスラムを身近に実感する機会があるほどである。

だが、北大の留学生数は全国の国立大学なかでは11位にとどまり、同規模の国立大学としては北大は留学生の少ない大学の部類に入る。当面は早期に千名の大台に乗せることを目指して、優秀な留学生の受け入れ拡大に向けて諸策を講じているところである。

### 北海道大学北京オフィスの設置の背景と効果

北海道大学は06年4月、大学としての最初の海外拠点として北京オフィスを開設し、中国法を専攻する筆者がその初代所長に就いた。以来、札幌での教員としての教育・研究と北京での所長職を兼務し、札幌・北京間を毎月往復する生活を続けている。折しも昨年5月から北京への直行航路が開かれ、札幌からの時間的距離は格段に縮まった。

中国ではこのところ日本の大学によるオフィ

大学の制度として整備し、留学生および指導教員の双方から好評を博している。

### 大学および地域にとっての留学生効果

北大北京オフィスの開設と同時に、06年5月には当時の中村睦男総長も出席して、北海道大学中国同窓会(会長は李里特・中国農業大学教授)の設立総会が開かれた。北大の中国人留学生受け入れは札幌農学校時代にかかのほり、戦後も数百名がエルムの森で学んでいる。中国同窓会は北大同窓生の親睦の場となるほか、将来はネットワークを活かして、心強い北大の応援団となることを期待される。

北大にきた留学生にはほほ共通する特徴は、みんな北大、そして北海道が好きになって帰って行くということである。北大の満足度は断然高いということを帰国同窓生に会うたびに実感する。北海道は大らかで開放的、人なつこい道民気質、豊かな自然あふれるすばらしい自然環境を誇る。多くの同窓生たちは帰国後も在学中に親しんだ北海道の人や風土を思い出しは懐かしんでくれている。在学中も留学生たちは小中学校への訪問やNGO活動への参加など、地域のさまざまな活動に参加し、地域における国際化にも大いに貢献している。卒業後も北海道で就職や起業をすることで、そのまま定住してしまつ留学生も少なくない。北大と北海道の発展にとって、外国人のなかにこつした理解者シンパを獲得することは、なんといつても心強い。北大は外国人留学生に選ばれるより魅力ある大学へと発展すべく、学内の英知を結集していきたいと考えている。

北海道大学国際交流室役員補佐  
同北京オフィス所長

鈴木 賢